

パウダーレスインキ「キレイナ」の実力 (広告)

7. 新技術を早くものにする意識 [東洋プリディア]

東洋プリディア(株)(亀井毅雄社長,社員150人)は、名古屋市北区に本社を置く、企画デザインから力を入れている総合印刷会社だ。1961年創業、2004年には愛知県犬山市にオフ輪工場を設置、2013年に東洋印刷工業から東洋プリディアに社名変更した。

枚葉印刷機においては、1995年に中部地区1号機(日本で4号機)の菊全判8色両面兼用機「スピードマスター SM102」を導入し、「ユポ」の両面印刷を初めて成功させている。

このように、隣が上手くいっているから当社もやるのではなく、自ら進んで新技術や設備の導入に取り組む企業体質である。

半信半疑から

仕事としては薄紙の両面印刷中心であり、パウダーの散布量は常に気にしていた。ここ数年は、湿し水を絞るなどしてパウダーの削減には力を入れていた。

前述のように同社は他社の先陣を切って、当時はまだセラミックジャケットもなかった8色両面兼用機を設備していた。また、両面機用としてのインキもまだない中、インキの圧胴取られに悩まされながらも、T&K TOKA とともにインキを改良し、さらに湿し水やローラーの管理をしっかり行うことで、8色両面印刷を行っていた。

時は経ち、2014年4月ごろ、パウダーレスインキ「キレイナ」が出始めたとの情報が入ってきた。T&K TOKA は発売後もさまざまな条件に対応できるように改良を続けていたが、横尾敦・印

刷部印刷チーム課長は最初は半信半疑だった。

発売から1年ほどで改良が進み、同社の条件でも効果が出せると確信し、試そうと考えた。

そして、2015年8月ごろにキレイナでの印刷を始めた。「感触はあった」という。

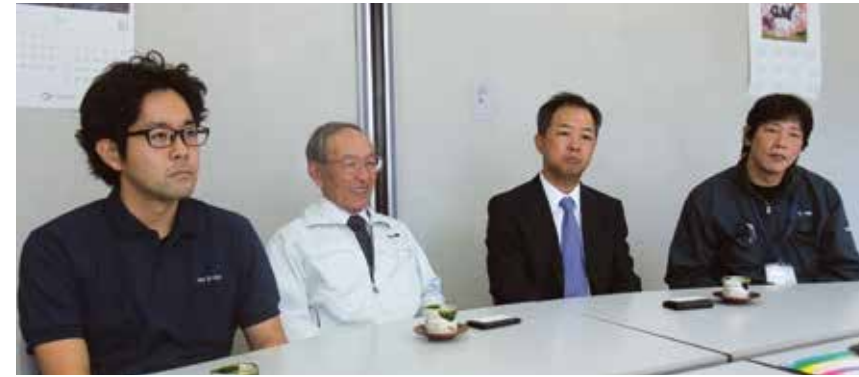
5分の1へ

同社はももとのパウダー量を100とすると、湿し水を絞るなど徹底した印刷管理により、8色機で60~40くらいまで落としていた。それが、キレイナの使用により「20」まで減らせた。その後も5分の1のパウダー量のまま現在まできている。もちろん、「最終的にはゼロにしたい」(社本浩司・生産管理部次長、横尾課長)のだが、ゼロで行うには紙の種類により、難しいものも少なくないようだ。(T&K TOKA としても上質系、マット系用紙の一部ではパウダーゼロでの印刷を推奨していない)

東洋プリディアでは、印刷機周りは、週末にメンテナンスを行っており、8色機は1~2胴ずつ保水の整備や定期的なローラー交換やニップ管理



取材時は、普通にきれいな工場になっている状態であるため、キレイナの使用前後の使い分けがわからないのが残念である



左から、横尾敦課長、亀井忠男常務、亀井毅雄社長、社本浩司次長

を行っている。

以前は、デリバリ部分などは、エアガンでパウダーを掃除すると、工場が真っ白になっていたという。それがキレイナを使用してから、デリバリ部分や印刷機の周り、そして工場全体もその白さが目に見えて減っていった。

トップダウンとボトムアップ

キレイナの導入により、パウダーポタ落ちのクレームや、それによる検品や刷り直しなどの後ろ向きな作業は圧倒的に減ったという。今ではクレームゼロを目指して、OP ニスでもキレイナの使用が増えている。

東洋プリディアからメーカーへの期待としては、用紙の適用範囲を広げ、絵柄の重さに関係なく多くの紙でパウダー「ゼロ」が可能なことだ。これ

にはもちろん、インキ任せだけでなく、水の適正管理や、印刷機のメンテナンスなど印刷会社としての取り組みも欠かせない。

亀井社長は自社の営業に、(さまざまな)紙の提案をするように言い、その経験値を多くするようにしている。技術的な面は、亀井忠男・常務取締役生産本部長が新製品を検討し、前述の社本次長や横尾課長に落としていき、逆に彼らは新技術の提案や良否を判断し上部に上げることで品質の向上を目指している。

また本社内に写真スタジオも完備し、企画、クリエイティブ、デザインにも力を入れており、4色広色域・高精彩印刷(350線)への取り組みも早かった。キレイナ含め、新技術を積極的に取り組み、常に顧客満足度を上げている企業である。

(つづく)

革新的なパウダーレスインキ「ベストワン KIRÉINA」誕生。

キレイナ印刷
キレイナ加工
キレイナ機械
キレイナ工場

BEST ONE
KIRÉINA

T&K TOKA

株式会社 T&K TOKA <http://www.tk-toka.co.jp>
TEL 049-258-1611(代表) 埼玉県入間郡三芳町間沢283-1 〒354-8577